

# 登山月報

第6回山岳スキー競技日本選手権大会	1
海外登山隊クロニクル・トークショー春編	3
新連載 Mountain World 第18回	4
日本山岳サーチアンドレスキュー研究機構総会	5
山岳レスキューと救急医療	5
AROUND THE MOUNTAIN・寄贈図書	8
JMA	9
ジュニア登山教室 in 立山お知らせ	12

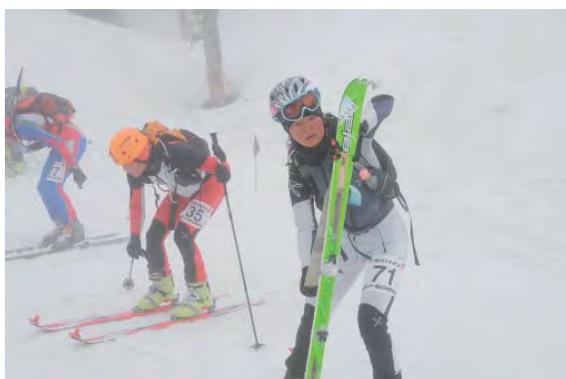
## 第6回山岳スキー競技日本選手権大会報告

山岳スキー競技小委員会 笹生 博夫

2010年4月10～11日長野県小谷村柵池高原で第6回山岳スキー競技日本選手権大会が開催された。

参加総数は50名で、国際規格レース成年男子25名、国際規格レース成年女子10名、男子ショートコース9名、少年男子1名、成年男子テレマーク4名、成年女子テレマーク1名で前年比1名プラスであった。

11日大会当日は雨と霧という最悪のコンディションであったが、コースを若干変更しレースが実施された。レースタイムは6位までがトップから10分以内と、前回までとくらべ上位選手の層が厚くなった。これは6年の大会実施継続の成果である。今回は初参加者が増え、また女子も11名と前年より2名増えた。そのためスキーのレンタルも5名と今までにない数であった。テレマークも5名と増えたのは望ましい傾向である。しかし前年比1名しか増えておらず、今後の参加者増が課題である。今年



手際よくシールを貼る選手

の特長は、レースの観戦をする人の数が以前にもまして増え、選手を激励していたのが印象的であった。今後は、さらに観戦者を増やすアイデアを考えたい。レース前夜の懇親会では、北海道や福島からの参加者がレース実施に強い意向を表明してくれたので、ぜひ実現させたい。各地でミニレースを増やして競



スタート直後、急斜面を駆け上がる選手たち



スタートする選手達

技を多くの人の目にさらし、レース経験者を増やすのが裾野を広げる一案であると思う。

レース後、参加者からいくつも感想のメールが届いた。どれも大会の印象をよく表しているので一部引用する。

「2回目参加の私の感想としては、運営のおおらかさや、参加者、運営の方双方の距離感の近さが本大会の魅力と感じています。今後もこのような雰囲気変わらず、規模の拡大となりますようお祈りします。・・・また参加させて下さい。」

「生憎の天気でしたが、大変楽しく、本当に満喫させていただきました。大会運営ご苦労様でした。また早朝は雨の中何時間も旗門にて待機していただいた役員の方のご苦労を思うと感謝に堪えません。」

「コースも変化があっていいコースだったと思っています。スタッフの方達もコース上にうまく配置していただいていたので、ガスって視界の悪いなかでも安心してレースをすることができました。ありがとうございます。今回印象的だったのは応援の声や鐘の音。非常に力になりますし、観客あってこそこのレースの目指す形になるのではと思っています。来年以降、うまく観ていただけるように配慮できたらなと感じました。」

いずれも運営側を元気づけてくれるコメントであった。

天候不良にともない大会前日にコース変更を余儀なくされたが、長山協諸氏の昼夜を分かたぬ努力でスムーズに役員配置変更が行われ、悪天の中でも事故もなくレースを終了することができた。コース役員は雨と霧の中、4時間以上雪上で運営に携わってくださいったことに頭が下がる。

さらに、長野県山岳協会には例年同様の全面的な協力をいただいたが、今年は特に3月に前会長柳澤氏が逝去されるという事態にも関わらず宮本義彦新

会長、西田均副会長、大西浩理事長始め例年以上の態勢で臨んでくださった。加えて石川県、富山県、新潟県の各県岳連からも応援が駆けつけ全スタッフ一丸となってすばらしい運営を展開して下さったことに感謝申し上げたい。例年通り小谷村、柵池高原観光協会、小谷・白馬遭対協、降籬義道氏、松原慎一郎氏など多くの地元の方々のご協力を得た。

最後に第1回開催に多大な尽力を下さって以来、今大会まで支えて下さった柳澤昭夫長山協前会長が、惜しくも3月に逝去された。ご冥福をお祈りする。

## リザルト

### 成年男子1

1	藤川 健	JPN	1:45:17.7	
2	三浦 裕司	JPN	1:48:27.8	+ 0:03:10.1
3	佐藤 佳幸	JPN	1:52:37.7	+ 0:07:20.0
4	伊藤 吉昭	JPN	1:52:53.5	+ 0:07:35.8
5	平田 伸也	JPN	1:53:16.4	+ 0:07:58.7
6	石橋 恭	JPN	1:55:34.9	+ 0:10:17.2
7	横山 峰弘	JPN	1:59:43.1	+ 0:14:25.4
8	Pak Jong il	KOR	2:05:19.6	+ 0:20:01.9
9	津田 桂	JPN	2:06:10.7	+ 0:20:53.0
10	Song Ki Hyun	KOR	2:12:51.4	+ 0:27:33.7

### 成年男子ショート

1	河地 尚志	JPN	2:05:00.3	
2	町屋 幸明	JPN	2:37:40.9	+ 0:32:40.6
3	数歩 俊英	JPN	2:48:30.0	+ 0:43:29.7

### 成年女子

1	間瀬ちがや	JPN	1:32:54.1	
2	伊藤真由恵	JPN	1:41:54.7	+ 0:09:00.6
3	堀部 倫子	JPN	1:47:00.5	+ 0:14:06.4

### 男子テレマーク

1	日向 秀司	JPN	1:39:18.7	
2	田中 義朗	JPN	2:11:17.3	+ 0:31:58.6
3	小野 郁生	JPN	2:12:51.4	+ 0:33:32.7
4	川端 進	JPN	2:34:53.1	+ 0:55:34.4

### 女子テレマーク

1	田近 郁美	JPN	1:53:01.0	
---	-------	-----	-----------	--

### 少年男子

1	Xin Detao	CHN	2:01:59.8	
---	-----------	-----	-----------	--

**ネパールに行くなら、 風の旅行社にお任せ下さい。**

元々はネパールから始まった風の旅行社。ネパールに支店も構えています。専門知識と経験で、皆様をがっちりサポートいたします。



**株式会社 風の旅行社**

観光庁長官登録旅行業第1382号 日本旅行業協会(JATA)正会員  
総合旅行業務取扱管理者 原ノ小宮山

〒165-0026 東京都中野区新井2-30-4 1F.0ビル 6F  
TEL.0120-987-553 FAX.03-3228-5174  
〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田2-5-25 ハービスPLAZA3F  
TEL.0120-987-803 FAX.06-6343-7518

URL <http://www.kaze-travel.co.jp/> e-mail [info@kaze-travel.co.jp](mailto:info@kaze-travel.co.jp)

# 海外登山隊「クロニクル・トークショー」

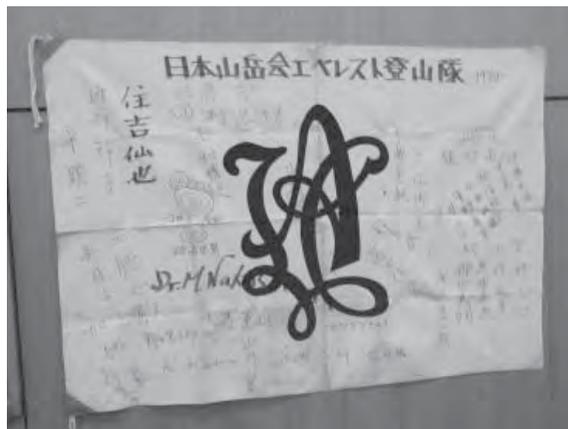
## 春編 The EVEREST Day をオリンピック青少年センターで実施



1970年日本山岳会エベレスト登山隊の皆さん

日本山岳協会創立50周年記念事業の一環として、海外登山隊クロニクル・トークショー「The EVEREST Day」が2010年4月24日（土）午後1時30分から国立オリンピック記念青少年センターで開催され、300人を越える参加者で開幕。

今回の行事は、世界最高峰エベレスト日本人初登頂40周年を記念して、日本山岳会エベレスト登山隊1970年隊の同窓会を中心に、当隊の大塚博美登攀隊長の挨拶、出席した14隊員の自己紹介に始まり、「登山隊の経緯と準備」を松田雄一隊員、「計画と実行」を平林克敏隊員が報告。頂上に立った松浦輝夫隊員、当時としては画期的なバリエーション登攀となった南壁（最近では南西壁）に挑んだ嵯峨野宏、加納巖両隊員のトークで前半のトークショーを終えて休憩に入る。後半は過去のエベレスト登山に関係したスナップを含むエベレストに関するBGM入りのスライドショーではじまり、1975年世界で初めての女性として登頂に成功した田部井淳子さんが1970年代のエベレストをトークし、1980年代に入り1980年日本山岳会チョモランマ登山隊、また1988年日本、中国、ネパール三国友好登山隊の北側（チベット側）登攀隊長として参加した重広恒夫さんが1980年代のエベレスト登山をまとめた。さらに1990年代は群馬岳連の冬期南西壁隊で活躍、自ら登頂した尾形好雄さんが日大北東稜ルートからの初登攀登山隊の報告を含め、エベレストの冬期登山を語り継ぎ、最後に世界女性最高齢エベレスト登頂者渡辺玉枝さんのトークで幕を引いた。司会進行



登頂を祈念して隊員がサインした旗

は1970年登山隊に参加した神崎忠男隊員がつとめた。終了後はエベレスト1970年登山隊隊員を囲むかたちで参加者の皆さんと交流懇親会を開催。無料とあって多くの参加者が出席してなごやかな懇親の場となった。

尚、この海外登山隊クロニクル・トークショーはシリーズ開催を予定し、7月24日(土)は「The UEMURA Day」を毎日ホール、9月11日(土)「The EXPEDITION Day」、12月5日(日)「The HIMALAYA Day」として国立オリンピック記念青少年総合センターで、過去のビック・エクスペディション登山隊の報告、現在そしてこれからの卓越した精鋭的若い人たちのクライミングの記録トークショーを予定、最後に来年1月16日(日)会場は未定だが、日本山岳協会創立50周年記念祝賀会の翌日に海外登山隊クロニクルの集大成として、海外登山隊の記録映画の上映をもって過去の登山隊の実績を楽しんでいただくシリーズ・トークショーを開催予定。ご友人誘い合わせてのご来場をお待ちいたします。



熱心にトークを聞く満員の聴衆

## 第18回 Mountain World

### 8000m峰14座女性初完登?

池田常道

女性初の8000m峰14座をめざしていたオ・ウンスン(44、韓国)が4月27日、アンナプルナI峰(8091m)の頂上に立ち、めでたく目標を達成した。この日彼女は、自らの快挙を撮影するKBSのカメラマン2人、これまで苦楽を共にしてきたダワ・ウォンチュラシェルパ3人の6人で最終キャンプC4(6950m)を出発、午後3時に登頂し、その模様はライブ中継されて同朋の元に届けられた。

女性初完登のライバル、エドウルネ・パサバン(37、スペイン)の一行は率先してルートを拓き、早くも10日前に登頂して13座目をゲット。次のシシャパンマへ向けて旅立ったが、先行を許してしまった(5月17日登頂に成功した)。今季アンナプルナに登った各隊は、例外なく彼女らが張った固定ロープの恩恵を受けていた。

ところで27日はスペイン、ポーランド、ロシア、ルーマニアなど各隊十数人がいっせいに攻撃し、午前10時のスペイン・ベア(ホルヘ・エゴチェアガとマルティン・ラモス)を皮切りに続々登頂、ウンスンのグループは後ろから2番目だった。下降は当然夜。ウンスンの組と、それから45分遅れて頂上に立ったファニート・オヤルサバル(スペイン)ら3人のうち2人は日付が変わるころC4にたどり着いたが、バルトロメ(トロ)・カラファトが600mほど上部で動けなくなった。付き添っていたソナム・シェルパがC4へ急を知らせ、もう1人のシェルパ、ダワが酸素を携えて派遣されたが、カラファトを発見することはできなかった。ヘリによる捜索でも見つからず、彼の遭難は確実となってしまった。

このとき、C3にいたウンスン隊のシェルパにも救援を要請したが、「別の隊だから」と断られたとオヤルサバルは語っている。ウンスンと共に頂上へ行ったシェルパに余力がなかったことは想像できるにしても、こちらの3人はフレッシュな体調だったことは確か。彼らの役割はKBSのカメラマン2人をBCまで送り届けることだった。ウンスンは「説得した」と語ったようだが、実際はどうだったのか。いずれにせよ、死にかかっている遭難者に背を向け

て山を下りたという印象を与えてしまったことはまちがいない。

\*

前年のガッシャブルムI峰やアンナプルナ登山でゴミ処理問題の不備を指摘されたウンスンに、もうひとつ大きな疑問が提出されている。昨年春のカンチェンジュンガ(8586m)で頂上まで行っていないのではないか、という疑問だ。

彼女は昨年12月にソウルで会見を開き、その場にダワ・ウォンチュも同席させて涙ながら弁明につとめた。しかし、彼女のスポンサー(ブラック・ヤク社)が発表した頂上写真は、(いかに悪天候だったとはいえ)これまでのカンチ頂上とはまったく異なる印象を与える(下の写真)。また、彼女が記念の旗を置いていった場所も頂上からずいぶん手前だったという。ブラック・ヤクは「彼女がまちがえて置いた場所」だというのが、ならばそこで証拠写真を撮ったのか、あるいは旗は置いたまま頂上まで行ったのか、疑問は深まる。カンチに同行した別のシェルパが登頂していないと言っているという報道もある。14座登頂を宣言して、のちに疑問をもたれた登山家はこれまでに何人かおり、いずれも疑惑を払拭できていない。



ライブ映像を見る人々



カンチ頂上の「証拠」写真

# 日本山岳サーチアンドレスキュー研究機構

## 平成22年度総会を神戸登山研修所で開催

日本山岳サーチアンドレスキュー研究機構（代表青山千彰関西大学教授）の平成22年度総会が4月25日（日）神戸登山研修所で開催された。平成21年度事業報告では、トムラウシの事故があり、それの対応に追われてしまい、最重要課題としていた第三者事故調査法の検討が進まなかったという反省があったが、2月27日にトムラウシ遭難事故を考えるシンポジウムを開催することができ、そのほか登山事故データベースと事故マップの試行（六甲山安全登山推進WG）も進めることができた。

続いて平成22年度事業計画について討議され次のようなテーマについて進めていくことになった。これらのテーマはワーキング・グループ形式で推進されるが、財政基盤が確立していないために当分ボランティア的に推進することになった。

テーマの第1は「第三者事故調査方法の検討」である。山岳事故の調査については特に決まった方法があるわけではなく様々な形で実施されている。それをある程度標準化し、第三者の定義も共通理解ができるようにすることが目標である。

第2は第1とも関係するが、「登山倫理」のワーキング・グループである。登山活動は登山者の全く自由な考えで進めて良い物ではない。共通の倫理を持つべきである。欧米の山岳団体ではこの登山倫理が最初にある。日本の企業も最近では企業理念を大事にしているのと同様に、登山でもそうあるべきというものである。

第3は「事故マップ、登山データベースの構築」である。現在、HPにアップしてある比良山の例を六甲山、奥多摩に拡大していきたい。これはグーグルアース上に事故地点をプロットし、道迷いと転滑落などの要因別に検索できるようにしたもので、日本の標準にしたいと思っている。

第4は「登山教育ならびに資格検定の実態調査」である。日本ではさまざまな団体が様々な教育をし、資格認定などを行っている。これらの標準化を進める前提としての実態調査である。これは、5月末に労山、日山協が招聘しているスティーブ・ロング氏が進めている登山指導者育成の国際標準化（UIAA STANDARD）と密接に関連したものである。

第5は継続テーマであるが、「山岳三団体（都岳連、労山、日山協）の事故調査」である。すでに1500件近いデータが集まり、その内容の濃さと件数については国際的にも高い評価を頂いている。これはIMSAR-Jの仕事ではないが国際的な事故調査内容の整合性というテーマもUIAAから頂いて活動中である。

このほかHPやPRの充実、人材バンクの充実なども進めなければならないが、会員はみな手弁当であり、価値ある活動であるが、十分な支援を得られないというきわめて日本的な進め方となっている。詳しくはホームページ（<http://www.imsar-j.org/>）を参照下さい。

（遭難対策委員長 西内 博）

## 山岳レスキューと救急医療

—国際山岳救助委員会における心肺蘇生法や脊椎固定法、低体温症対応アルゴリズムについて—

日本山岳協会医科学委員 梶谷 博（日本モンブランクラブ）

昨年9月スイス・ツェルマットで、国際山岳救助委員会（ICAR）総会が国際偶発性低体温症シンポジウムも含めて開催され、梶谷が参加した。

ICARは山岳遭難現場での救出活動から救急医療までに関する国際協議機関で、①テレストリアルレスキュー（山岳現場での活動）、②エアレスキュー（ヘリによる活動）、③雪崩・スキーレスキュー、④山岳医療の四つの部会から構成されている。ICARの加盟団

体は、欧州を中心とした各国の山岳救助関連組織で、本邦では警察、消防、遭難対策協議会などの公的救助機関に相応する組織であろうが、本邦は、現時点ではシャモニー・ガイド組合との交流から日本モンブランクラブ（都岳連）が加盟している。

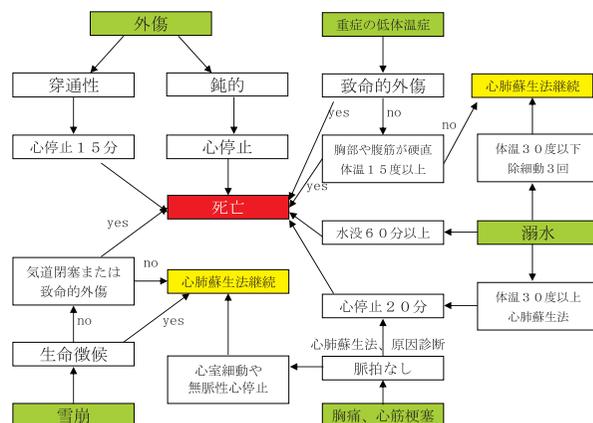
4,000m級の山岳や氷河地帯に容易にアクセスできる欧米と本邦では山岳レジャーの性格が異なっており、欧米での山岳レスキューの話題は雪崩やクレバス

事故が中心であるのに、本邦でよく話題になるは中高年登山者の道迷いや転倒滑落、疲労凍死などであり、遭難の性格がやや異なっていること、欧米では山岳ガイドが公的資格であり、欧州を中心とした各国の山岳救助関連組織にガイドも関わっていることからICARの活動にガイドもよく関わっているが、本邦では、ガイド資格が公的資格ではなく歴史的に警察庁、消防庁、遭難対策協議会などの公的救助機関とガイドとの関わりが少なかったため、ICARの活動に本邦が関わりにくかったと思われる。

しかしながら、本邦の山岳遭難には本邦ならではの事情があるにせよ、これを客観的に評価していくには、多様な価値観、国際的な視野で俯瞰することも必要であろう。筆者は医師としての立場からICARでの協議や講習、実習を体験し、特に蘇生処置のアルゴリズムについては、専門性が高いため本邦の山岳関連の文書類で明確に記載されているのを見たことが無く、また、ちょうど昨夏、栃木岳連の遭対委員長より山中での蘇生中止の判断基準を求められていたこともあり、まずはこれを報告したい。また、遭難現場での救急医療の在り方についても、脊椎固定や低体温症への対応など、市中の救急医療現場と同等の対応を山岳救助現場から開始していることに感心したので、併せて報告する。

本邦で登山者の立場でレスキューの話題となるとセルフレスキュー技術が大きく扱われるが、これは事故現場にいあわせた登山者が公的救助に引き継ぐまでの初期対処であり、十分な器材を持っていないのが前提である。しかし、医療機関への迅速な搬送もままならない山中であるからこそ質の高い初期治療を行っておく必要性があり、ドクターヘリも普及しつつあるが山岳においてはまだ十分な初期治療が行われているとは言いがたい。筆者の経験では警察や消防、

図1. 山岳救助現場での蘇生法アルゴリズム (ICAR2009 医療部会の協議による)



訳注  
 アルゴリズムについて：本邦でも市中の医療現場においてはごく標準的な内容であるが、これらを山岳救助の現場隊員に示す点で、合理的な救助救命を追求する姿勢が感じられる。現場でこのフローに従うには、平素の十分なトレーニングやエア・レスキューが前提となる。また、このようなアルゴリズムを示すことで、明らかに蘇生困難と判断される場合には不用意にヘリコプターを出動させない、という面も強調されていた。  
 鈍的外傷：落石の下敷きになり内蔵破裂した場合など。  
 心停止：心収縮なし。携帯型心電図などにて確認。  
 死亡：本邦では死亡診断は医師、歯科医師のみ可能。  
 気道閉塞または致命的的外傷：雪崩埋没時にエアポケットが無い。埋没時に明らかな頭部や頸部の変形をきたしたなど。  
 生命徴候呼吸、心拍、体温、瞳孔反射など生きている証。バイタルサイン。  
 体温：本邦のような腋下体温でなく、鼓膜温（外耳で測定）か食道温（意識が無い場合）で判定する。体温が低い場合ほど、仮死状態から回復する可能性が高いため、より積極的な蘇生法が推奨されている。  
 心室細動、無脈性心停止心室細動（VF）は心室が痙攣したような状態で、有効な脈拍が作れず脳など全身への血流が途絶えた状態。無脈性心停止（PEA）は心臓自体は脈拍を作っているが、大量出血などさまざまな理由で全身への血流が途絶えた状態。

一部の野外ファーストエイド講習会など専門家以外の各種レスキュー講習会では、搬送時の頸椎や脊椎固定にまで十分に配慮が至っていないのが実状と感じている。また、未組織登山者や単独登山者が増加しているためか、山中での救急対応について、偶発的の遭遇者や傍観者が、心肺蘇生法を必要な状況で実施している率が半数程度と報告されている。心肺蘇生法は応急処置の基本であり、遭難に対応できる最低

写真1. 山岳遭難現場での固定（ICAR総会での講習）



腕や下腿の骨折は素人目にもわかりやすく、容易に固定を思いつくであろうが、頸椎や脊柱（背骨）、骨盤、大腿骨の骨折は外部からは判断しにくく、かつ、致命的にもなりえる重症の状態である。転落、滑落などによる高エネルギー外傷の際は、受傷者に必ずネックカラーを装着し、頭部から脊椎、骨盤にかけてバックボードに固定する。受傷直後は歩行可能でも、運動しているうちに脊椎損傷をきたし下半身不随の後遺症を残す場合があるからである。大量の内出血をきたし致命的になりうる骨盤骨折や大腿骨骨折が疑われる際も、器具で固定し、搬送中に動かないようにする。同等の処置は本邦でも交通事故現場などでは行われており、ヘリが出動できれば山中の遭難現場でも行える。また、先端的な野外ファーストエイド講習会などでも固定法は教えているようであるし、本邦でも一部のパーティー（はサムスプリント (r) (簡易のギブス) を山行時に携行しているようである。しかし、まだまだ一般登山者にとって固定法やサムスプリント (r) の認知度は低く、広く知られていないとは言いがたいであろう。高エネルギー外傷に遭遇した場合、非医療従事者であっても、頸椎や脊柱、骨盤、大腿骨の固定の重要性は知っておいた方がよい。

写真2. バックボードの使用 (ICAR 総会での実習)



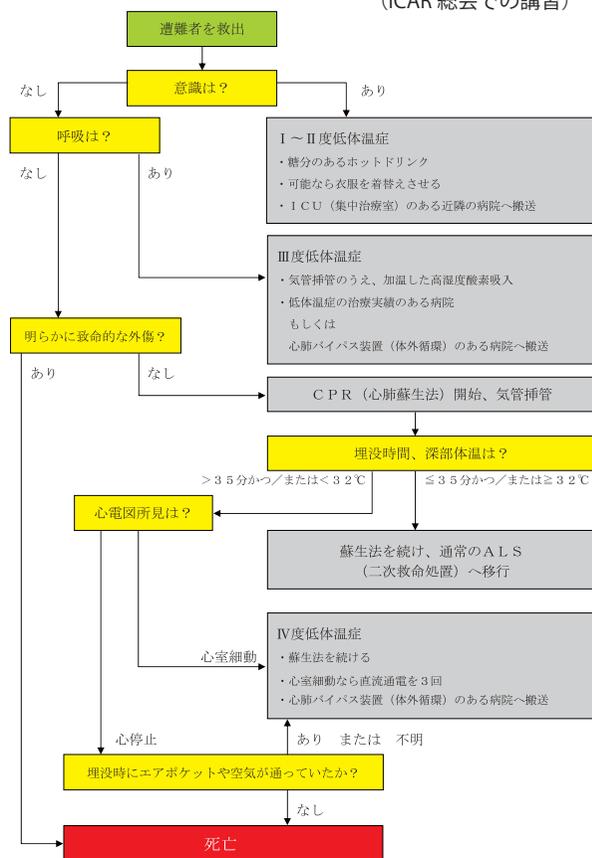
コング社製の折りたたみ式バックボード。カーボン製で幾ら軽いとはいえ、エアレスキューが前提であろう。このように、外傷についても市中での救急処置と同様に、遭難現場で頸椎、脊柱、骨盤、大腿骨を固定してから搬送することを現場隊員に指導している。欧州と本邦では山岳環境や社会的インフラが異なるので、一概に是非を問うことには無理があるが、受傷者の予後がより改善するよう(回復がより有利になるよう、あるいは、救命できえるのに救命できなかったことが無いよう)、例え山中であってもドクターヘリも含めた物量作戦で救助に努めている状況には感心した。

限の登山医学的知識の一つであろう。消防が無料の心肺蘇生法の講習を実施しており、セルフレスキューの範囲であっても、登山者が心肺蘇生法のみならず頸椎や脊椎固定にも配慮できるよう登山医学的知識の普及やレスキュー技術の工夫が望まれる。

ところで、セルフレスキュー技術は必須の登山技術の一つとして重要ではあるが、あくまでもpersonal rescue techniqueの範疇である。遭難者の生存率や予後改善(回復がより有利になるよう、あるいは、救命できえるのに救命できなかったことが無いよう)を大きく前進させるには、personal rescue techniqueの向上のみならず、人海戦術、物量作戦で救出～救急医療活動を行うorganized rescue systemの構築が不可欠である。今回のICAR総会において、山岳遭難現場に投光器や大型搬送用機材、電動工具、各種医療機器、発電機、捜索犬などを持ち込み、救急処置ガイドラインに従って迅速に体外循環などの高度医療に移行させている欧米の状況を見聞し、山中でのレスキュー現場と救急医療がシームレスに運用されている社会システムに感心したが、本邦の山岳環境や社会的インフラの状況、山岳遭難に対する社会の価値観では、彼の地のやり方を模倣することは困難であり、日々遭難事故に苦勞して対応なさっている関係者の方々には無理難題というものであろう。本邦でも登山

は人気のある余暇活動であり、インフラ整備や財源確保などの社会的コンセンサスが欲しいところである。

図2. 西部カナダでの低体温症の救急対応アルゴリズム (ICAR 総会での講習)



訳注  
携帯型心電図を用いたりAEDを用いた蘇生術を遭難現場から開始し、高度医療機関へ連携させている。体温測定は本邦で一般的な腋下温でなく鼓膜温を用い、収容以降は直腸温や食道温である。本邦での低体温症は、雪崩埋没やクレバス転落事故よりも、トムラウシ大量遭難死のような気象遭難や道迷い遭難による“疲労凍死”あるいは“wet hypothermia”が多いであろうし、救出までに時間がかかる例が多いであろう。ここに示されているアルゴリズムのように、事故発生から迅速に体外循環へ導入していくのは容易ではなさそうである。しかし救命率を向上させるには、シェルターや保温などのセルフレスキュー技術もさることながら、迅速に高度医療機関へ搬送させることが合理的である。実際に低体温症による長時間の心肺停止より蘇生し救命できた事例は、国内外ともに現場から救急医療が開始された例である。なお、図には示されていないが、雪崩やクレバス事故が多いためか、講習では低体温症に併発している外傷頻度の多さがしばしば強調されていた。

アウトドアスポーツ用 GPSレシーバー **ATLAS® ASG-1** 販売価格 14,800円(税込)

**正確な位置情報があなたを助ける!**

- 現在地の緯度・経度情報を表示
- 移動中の速度・高度・距離を表示
- 自動ログ機能搭載

移動ルートをパソコンに表示した地図(Google Maps™)上で確認できる!

株式会社 コピテル 〒108-0023 東京都港区芝浦4-12-33  
TEL 03-3769-2525 FAX 03-3769-2520  
お問い合わせ先: アトラス事業部 山下まで

ASG-1(黒) : ブラック  
ASG-1(白) : ピンク

<https://atlas.yupiteru.co.jp>  
※ご購入は弊社ホームページからアトラスクラブに入会(無料)し、直接購入もできます。



# AROUND THE MOUNTAIN

## ■IFSC総会報告

2010 IFSC 総会 in Bali 報告  
(北山 真、小日向徹)  
参加約 40 カ国

### ■おもな課題と結果

- 1 新しいIFSC事務局長は信任投票の結果、ピエールアンリ・パイアソンFFMEに決定。神奈川で行われた、第1回のルートセッター・トレーニングコースの講師である。
- 2 新メンバー国 アゼルバイジャン(ECC 予定)とヨルダン(ACC! 予定)
- 3 2012年の世界選手権は、パリ・ベルシー(東京でいえば武道館か)に決定。なおこの年からこれまでの奇数年から偶数年に変更。→ワールドゲームズとのバッティングを避けるため。
- 4 2010年の世界ユース選手権はシンガポールに決定。→不安。もっとも大変な大会だから。
- 5 IFSC 総会の予定。2011年はローマ/イタリア。2012年はアムステルダム/オランダ。
- 6 2010年のシリーズより主要なイベントのWEBキャストイングのための必要予算。6万ユーロを承認。
- 7 2011年以降の会費の値上げ案が示されたが、根拠が不十分との意見が多数出されたため、次回総会に執行部がその必要性・根拠を明示することで、今回は投票せず。その一方で、中国が特別なファンド目的なら約120万円。香港がその半分の60万円を拠出する用意があるとの提案がなされた。やはり中国関係はリッチ。
- 8 IOCに正式加盟したため、20年にわたる香港の2団体問題については解決をせまられる。総会では今回は扱わず、ACCでまず解決を求められる。ACCでは非公式な会合を数回行い、3/15または3/20までに、当事者間で話し合い、解決するように打診。両団体承認。



ブラインドクライミング大会のプレゼンをする小日向委員

### ■ブラインドクライミング(視覚障害)世界選手権

小日向がプレゼンを行う。(イタリア ロシア 香港 スペイン フランス ネパール タイ)などから、その後好意的コメントをいただく。

IFSC 会長マルコのコンペ臨席のための来日(渡航費はIF持ち、滞在費は日本)を打診。

副会長アレクサンダー(ロシア 来日 & 滞在は同条件)では、なにかと心もとないため……夕食時に依頼、快諾。

一方で、IFSC、PARA、COM からは、次の2点を求められる。

- 1 他のIFSCパラクライミングへの日本の参加(本年は日本のほかイタリアとロシア)
- 2 今回の日本での大会に、他の障害を持つクライマーのデモ参加(デモ競技として行ってほしいとのこと、ちなみに他のイベントは障害者の受け入れ制限を絞っていない)。

いずれも筋はある程度通っているが、即答できるものではないため、持ち帰って回答すると返答。

■2010 アジアユースイランに黄色信号  
イラン開催に賛成した国の多くが不参加表明(日本ははっきり反対)。イランからは日程詳細出ず。一方インドネシアが手を挙げる。

## ■国際委員総会・海外登山遭難対策研究会

期日: 6月19日(土)~20日(日)

場所: 公共の宿 日光市営 交流促進センター  
対象: 日山協役員および国際委員会常任委員  
都道府県岳連(協会) 国際・海外担当者  
講師をお願いする海外登山経験者・研究者  
海外登山に関心を持ち参加希望の方  
費用: 参加費 12,000 円、懇親会費 3,000 円  
講演: 保坂昭憲氏「ヒマラヤにおける気象予報を活用した登山」  
猪熊隆之氏「ヒマラヤにおける最新気象技術」  
神長善次氏「ヒマラヤの醍醐味」  
申込: 日山協事務局(6月8日締切)

## ■遭難対策委員会 総会・研修会

期日: 6月26日(土)~27日(日)

場所: 箱根・仙石原 神奈川大学箱根保養所  
対象: 日山協役員および遭難対策委員会常任委員  
都道府県岳連(協会) 遭難対策担当者  
講師をお願いする遭難対策関係者・研究者  
遭難対策に関心を持ち参加希望の方  
費用: 参加費 6,500 円、懇親会費 1,500 円  
内容: 神奈川大学「セブンスミット報告」  
青山千彰氏「トムラウシシンポジウム報告」  
「第7回山岳事故調査報告」  
グループ討議①  
「鈴鹿山系の事故の現状と対応の問題点」  
グループ討議②  
「霧島山系の事故の現状と対応の問題点」  
申込: 日山協事務局(6月10日締切)

## ■高尾山子ども冒険学校

～子どもたちよ、冒険者たれ  
期日: 8月3日(火) 4日(水) および  
17日(火) 18日(水)  
場所: 高尾山日影キャンプ場、周辺  
主催: 毎日新聞社、後援: 日山協ほか  
対象: 小学4年生から中学1年生までの  
男女 計60名  
費用: 参加費 6,000 円  
告知: 毎日新聞都内版、毎日小学生新聞

## 寄贈図書

### ●寄贈本●

京都府勤労者山岳連盟  
冬の黒部記録集 伊藤達夫

### ●雑誌●

東京新聞出版局 岳人 5月号

山と溪谷社 山と溪谷 5月号  
ROCK & SNOW

### ●会報●

(財)健康体力づくり事業財団  
兵庫県山岳連盟  
(財)日本尾瀬保護財団  
三峰山岳会  
国立スポーツ科学センター  
横浜山岳会

(財)日本ゲートボール連合  
(財)国立公園協会  
(財)日本武術太極拳連盟  
大韓山岳連盟  
大阪府山岳連盟  
(財)熊本国際観光コンベンション協会  
日本フリークライミング協会  
高校生新聞社  
(財)全日本ボウリング協会  
(財)富山コンベンションビューロー

愛知県山岳連盟  
日本勤労者山岳連盟  
東京野歩路会  
(財)パワーリフティング協会  
新潟県山岳協会  
(財)日本山岳会  
財大崎企業スポーツ事業研究助成財団  
やまびこ山想会  
近畿山岳愛好会  
(財)国土緑化推進機構



平成22年度 4月 (22年 4月)  
常務理事会議事録

日時 4月8日(木) 17:30～21:00  
場所 岸記念体育会館103会議室  
出席者 田中会長、内藤副会長、  
神崎副会長、本木副会長、仙石、  
西内、堀井、尾形、北山、相良、  
永井、長谷川各常務理事、谷口  
委任 中島副会長、佐藤、高山、  
青木、寺内常務理事  
(17名中12名出席)

1. 専門委員会動静

3月常務理事会以降  
(3月4日～4月7日)

〔報告〕

- (1)指導委員会 3月8日(月)  
出席者14名  
ア 報告事項  
・ 氷雪技術研修会(大山)について  
・ 登攀技術研修会報告書(熊本)について  
・ 義務研修の事務処理について  
イ スポーツクライミング指導員  
制度の今後の進め方について  
ウ 山口県のスポーツクライミング  
上級指導員養成講習会の実施  
申請について  
エ ロープ結束について  
オ 氷雪技術研修会兼主任検定員  
養成講習会(富士山、3/20  
～22)について  
カ その他  
指導員認定申請: 茨城9名、  
岩手1名、宮崎15名  
(2)選手強化委員会 3月8日(月)  
出席者5名  
ア I F S C総会(パリ)報告  
・ 2011世界選手権(パリ)  
・ 2012世界ユース選手権(シン  
ガポール)  
・ 7月末のアジアユース選手権  
(イラン)は開催が微妙  
・ 世界ユース選手権(エジンバラ  
大会)の選考方法について  
(JFAユース選手権大会で半  
分を選考する)  
・ ユース代表強化合宿(2011年

- 1月上旬)について  
(3)海外委員会 3月9日(火)  
出席者11名ほかJAC7名  
ア JAC海外委員会との共催に  
よる50周年記念事業について  
・ 海外登山隊クロニクル・トーク  
ショー(4/24)の内容及び役  
割分担  
(4)指導・競技合同委員会  
3月10日(水) 出席者9名  
ア スポーツクライミング上級指  
導員の認定と今後のスケジュール  
について  
(5)自然保護委員会 3月16日(火)  
出席者16名ほかHAT-J3名  
ア 50周年記念事業と募金委員  
会の取り組みについて  
イ 国際自然保護/青少年委員会  
合同東京会議2011について  
ウ JMA平成22年度行事予定  
表について  
エ 平成22年度自然保護指導員  
の登録者一覧について  
オ 50周年記念誌記録原稿につ  
いて  
執筆: 青木、浅見、長谷川(3  
月末まで)  
カ トレイルランの今後の方向性  
について(関東地区山岳連盟協  
議会総会)  
キ 尾瀬のシカ対策、イノシシ  
緊急捕獲(上毛新聞記事、H  
22.3.4)  
ク 野生鳥獣目撃レポートのパン  
フレット(案)について  
ケ 山梨岳連・磯野自然保護委員  
長からの活動状況の提起について  
コ 平成22年自然保護委員総会  
(9/11～12、新潟)  
3/20～21、現地打合わせ(長  
谷川委員長ほか2名)  
サ 第1回自然保護委員会現地研  
修(6/19～20、尾瀬・帝釈山・  
会津駒ヶ岳)  
シ 大台ヶ原における日本シカ個  
体数調整に係る試験の実施状況  
ス 6月に開催される日本山岳会  
のシンポジウムへのサポート依  
頼(自然環境連絡会)  
セ 自然環境連絡会: 6団体協議  
会報告 次回3月18日(木)  
長谷川、松永、松隈  
(6)広報委員会 3月17日(水)

【50周年記念募金協力者ご芳名】

(5月15日現在)

10口・尾形好雄、4口・佐藤光由、清野孝、  
2口・木戸繁良、亀尾崇、尾花沢山の会  
総額: 96口・4.8万

- 出席者5名  
ア 4月の登山月報予定  
イ その他  
・ 日山協リーフレットについて(検  
討の結果を反映してからメール  
で報告)  
・ ロゴマーク使用規程(継続審議)  
(7)普及委員会 3月17日(水)  
出席者5名  
ア ジュニア登山教室(立山)に  
ついて  
ポスター、申込みチラシの検討・  
手配  
イ 中高年安全登山指導者講習会  
講義内容について  
山梨、広島状況について、講  
師依頼の検討  
ウ 第49回全日本登山体育大会  
(静岡)の内容について  
50周年記念行事としての「テー  
マ」について  
(8)競技委員会 3月18日(木)  
出席者15名  
ア 3月常務理事会報告  
・ 平成22年度選手登録(改正案)  
について  
・ 50周年記念事業について  
イ 第2回理事会、臨時総会の報告  
・ 21年度事業報告及び22年度事  
業予定について  
ウ ブロック研修会実施報告  
エ 第6回山岳スキー競技大会  
(4/10～11)の進捗状況に  
ついて  
オ 国体後備員の準備状況について  
・ 東京都(H25): 準備委員会が  
立ち上がり、常設の方向。  
カ 日山協競技部の3分割による  
組織図変更の確認  
内藤副会長より競技部の将来  
の方向性を説明  
キ C級クライミング審判員の認  
定登録方法の変更について  
ク 平成22年度競技部委員総会  
の役割分担について  
ケ 第6回アイスクライミング・  
ジャパンカップの報告  
(9)選手強化委員会 3月28日(日)

# あなたの保険は、 安心して登山ができる保険ですか。

自分だけは安全、と思いがちですが、  
年間遭難者数は約2,000人です。

## ■平成20年 山岳遭難の概況

(警察庁生活安全局地域課 平成21年7月3日)

発生件数 **1,631** 件

遭難者数 **1,933** 人

死者・行方不明者 **281** 人

詳しくは → [www.jma-sangaku.org](http://www.jma-sangaku.org)

お問い合わせは

**日本山岳協会 山岳共済会**

事務委託：日本山岳協会山岳共済事務センター  
月～金 10:00～17:00 (土・日・祝日除く)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707  
TEL：03-5958-3396 FAX：03-5958-3397  
E-mail: sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

出席者6名  
ア 平成22年度日本代表選手について(別紙)  
(10)指導委員会 4月5日(月)  
出席者10名  
ア 前回委員会の議事録確認  
イ 氷雪技術研修会(富士山)の報告  
ウ 事務処理  
・委嘱状の申請形式について  
・委嘱の追加県について(義務研修:5県)  
・認定について  
(上級指導員:大阪3名、神奈川3名 指導員:神奈川6名、北海道15名)  
・証明書、認定証の発行について  
エ 氷雪技術研修会(大山)のまとめについて  
オ 競技・指導合同研修会(4/17~18、丹沢)について  
カ 指導員総会について  
キ ロープ結束テストについて  
ク アルパイン資格保有者のスポーツクライミング上級指導員養成講習会について  
6/19~20、山梨県小瀬スポーツ公園

## 2. その他の重要事項

(3月4日~4月7日)

### 【報告】

- (1)スポーツドクター代表者協議会  
3月6日(土) 於:岸記念体育会館  
堀井常務理事
- (2)JOC第2回選手強化本部会  
3月9日(月)  
於:味の素ナショナルトレーニングセンター 中川事務局員
- (3)50周年記念祝賀会皇太子殿下行啓打合わせ 3月11日(木)  
於:東宮御所 田中会長
- (4)平成21年度第2回理事会、臨時総会 3月14日(日)  
於:日本青年館ホテル 田中会長ほか、理事、監事、正会員
- (5)新公益法人制度打合わせ  
3月15日(月) 於:事務局  
本木副会長、尾形事務局長
- (6)JOC総務委員会 3月16日(火)  
於:岸記念体育会館  
尾形常務理事
- (7)財自然公園財団理事会

- 3月16日(火)  
於:法曹会館 田中会長
- (8)「山の日」制定打合わせ  
3月17日(水)  
於:日本山岳会ルーム  
本木副会長、尾形事務局長
- (9)長野県山岳協会・柳澤昭夫会長、逝去。 3月23日(火)
- (10)パルドール・ピーク登山隊打合わせ 3月23日(火)  
於:風の旅行社  
尾形常務理事、八木原隊長ほか
- (11)スティープ・ロング氏講演会打合わせ 3月24日(水)  
於:労山事務局  
西内、尾形常務理事
- (12)財日本体育協会評議員会  
3月24日(水)  
於:岸記念体育会館 田中会長
- (13)日体協競技団体評議員連合会幹事会 3月24日(水)  
於:岸記念体育会館 田中会長
- (14)第6回山岳スキー競技大会実行委員会 3月25日(木)  
於:榎池高原  
本木副会長、笹生、佐伯常任委員
- (15)長野県山岳協会・故柳澤昭夫会長、通夜 3月25日(木)  
於:北安曇郡池田町自宅  
田中会長、内藤副会長
- (16)長野県山岳協会・故柳澤昭夫会長、葬儀・告別式 3月26日(金)  
於:J Aホールまつかわ  
本木副会長、尾形常務理事
- (17)平成21年度ユース代表活動報告会 3月28日(日)  
於:岸記念体育会館  
北山常務理事ほか
- (18)「山の日」制定打合わせ  
4月2日(金)  
於:事務局 JAC藤本副会長、成川常務理事、尾形事務局長
- (19)競技部総会 4月4日(日)  
於:岸記念体育会館  
高山、北山、寺内常務理事ほか

## 3. 議事

- (1)平成21年度3月常務理事会議事録の承認について(提案通り承認)
- (2)平成21年度第2回理事会議事録の承認について(提案通り承認)
- (3)平成21年度臨時総会議事録の承認について(提案通り承認)

- (4)平成22年度決算理事会・通常総会の開催と運営について(提案通り承認)
- (5)平成22年度補正予算について(上期執行状況をみて補正を組むことで承認)
- (6)2010年日本代表選手について(提案通り承認)
- (7)賛助会員の承認について(提案通り承認)
- (8)特別会員候補者及び理事候補者の推薦について(提案通り承認)
- (9)公益財団法人への移行に伴う日体協評議員候補者の推薦について(内藤副会長兼専務理事を推薦することで承認)
- (10)未収入金の損金処理について(共済会事業の交付金等で処理することで承認)
- (11)UIAA名誉会員候補者の推薦について(提案通り承認)
- (12)登録選手の制裁について(会長案で対応することで承認)
- (13)財団法人日本アンチ・ドーピング機構認定・アンチ・ドーピングマスター制度に依る候補者の推薦について(アンチ・ドーピング委員会に一任することで承認)
- (14)国体山岳競技規則の改正案について(提案通り承認)
- (14)報告事項

ア 平成22年度日体協公認アスレティックトレーナー養成講習会受講者の推薦について  
永島知明、矢島亜弓、成田英世の3名を推薦。

イ 平成22年度日体協公認スポーツドクター養成講習会受講者の推薦について  
平成22年度は、希望者なし。

ウ 平成22年度会員・役員・委員名簿の書式について

エ 50周年記念事業募金について  
オ 神奈川県山岳連盟からの再質問・要請について

## 4. 役員等の派遣について

- (1)UIAA登山委員会  
4月9日(金)~11日(日)  
於:スペイン(Montserrat)  
青山遭対副委員長
- (2)「山の日」制定協議会  
4月9日(金) 於:岸記念体育会館



# (社)日本山岳協会創立50周年記念

## みんな集まれ！ジュニア登山教室 in 立山

日本を代表する山やまがそびえる北アルプス、雪渓の白と高山植物の緑に彩られた美しく雄大な立山の自然を体感し、環境を考えてみませんか。「立山」のふもと立山青少年自然の家にみんな集まれ！

【と き】2010年8月9日(月)～12日(木)(3泊4日)

【ところ】富山県立山町「国立立山青少年自然の家」

【内 容】立山登山、カルデラ博物館見学、森や野原の恵みを使ったクラフト、クライミング体験、弥陀ヶ原自然観察・青少年自然の家散策など

【募 集】小学校4年生から中学校3年生ぐらいまで60名(先着順)

※兄弟で参加の時はご相談ください

【参加費】こども15,000円(保険料、宿泊食事3泊9食代等)

※現地までの交通費は各自ご負担下さい。送迎バス(東京発)利用は往復5000円。

【申込み・問合せ】(社)日本山岳協会 事務局

〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1

TEL:03-3481-2396 FAX:03-3481-2395

※集合場所、日程、持ち物、服装などについては受講通知と詳細資料を送付します。

【締 切】7月10日(土)※締切日過ぎてのお申込みはご相談下さい。

【主 催】(社)日本山岳協会 国立登山研修所

【協 力】富山県山岳連盟

【後 援】富山県教育委員会、立山町、国立立山青少年自然の家、立山カルデラ砂防博物館、(社)日本山岳協会・北信越ブロック

【登 山】3コースから選択してください(日帰り登山です)

登山A(歩行約5hr):室堂(2433m)～ノ越～立山(大汝山3015m)～室堂

登山B(歩行約4hr):室堂(2433m)～室堂乗越～(2511m峰まで)～室堂乗越～室堂

自然観察C(歩行約3hr):室堂(2433m)～みくりが池～地獄谷～天狗平

※登山は自然を相手にしたスポーツです。指導者の注意を守って安全に行動しましょう。

【日 程】

※多少の雨でも実施しますが、日程が入れ変わることがあります。

◆8/9(月)

開校式、オリエンテーション、チーム別ゲーム・ミーティング、夕食・交流会、フリーセッション

◆8/10(火)

登山、夕食・交流会、キャンプファイヤー

◆8/11(水)

自然の家散策・クラフトの時間、立山カルデラ砂防博物館見学、クライミング体験(国立登山研修所)、夕食・交流会、フリーセッション

◆8/12(木)

自然の家散策、閉校式、出発(称名の滝見学)

尾形常務理事

(3)遭難対策常任委員研修会

4月10日(土)～11日(日)

於:埼玉県伊奈町・県民活動総合センター 西内常務理事ほか

(4)日体協加盟団体事務局長会議

4月20日(火)

於:岸記念体育会館地下3F講堂 尾形常務理事

(5)2009年度ミズノスポーツメン

トール賞表彰式 4月21日(水) 於:グランドプリンスホテル新高輪 尾形常務理事

(6)平成22年度第1回加盟団体連絡

会議兼ドーピング防止研修会 4月22日(木)

於:国立スポーツ科学センター 研修室A・B 堀井常務理事、西谷委員、中川事務局員

(7)50周年記念事業「海外登山隊

クロニクルTheEverestDay」 4月24日(土) 於:国立オリンピック記念青少

年センター

田中会長、内藤、神崎、本木副会長、堀井、青木、尾形常務理事

(8)会長・副会長選考委員会

4月25日(日)

於:岸記念体育会館504会議室 田中会長、内藤副会長、尾形常務理事

(9)会計監査 4月26日(月)～27日(火)

於:岸記念体育会館504会議室 福田、岡本監事、相良、尾形常務理事、秋山事務局員

### 5. 後援、協賛等の依頼について

(1)第18回比婆山国際スカイライン大会の後援名義(提案通り承認)

(2)第2回ジャパンユースカップの後援名義(提案通り承認)

### 6. 報告

(1)自然保護指導員の承認(提案通り承認)

東京17名、北海道8名、宮城1名

(2)指導員の認定承認(提案通り承認)

①上級指導員

大阪3名、神奈川3名

②指導員

神奈川6名、北海道15名、宮崎15名、岩手1名、茨城6名

③スポーツクライミング上級指導員専門科目修了者

54名

④スポーツクライミング主任検定員

23名

### 登山月報 第494号

定 価 100円(送料別)

予約年間1、200円送料共

昭和45年12月12日

第三種郵便物認可

(毎月1回15日発行)

発行日 平成22年5月15日

発行者 東京都渋谷区神南1の1の1

岸記念体育会館内

社団法人日本山岳協会

電 話 03-3481-2396

F A X 03-3481-2395